

現実性（リアリティ）という観念は、イデオロギー（という観念）と対比されることによって、その意味の一端を捉えることができるように思われる。これを経済学の例で説明する。

古典派経済学は本質的には現実を直接に観察することで理論構築を行ったと言える；

文明国で繁栄している社会の最も普通の職人または日雇労働者の家財道具を見れば、彼にこの家財道具を獲得させるために勤労の一部分をたとえ小さな一部分にせよ費やした人々の数は、計り知れないほど多いことが分るだろう。例えば、日雇労働者の身体を被う毛織の上着はたとえ粗末で手触りの荒い物に見えようとも、多数の職人の結合労働の産物である。この質素な生産物でさえ、その完成のためには、羊飼、剪毛工、刷毛工、染色工、紡績工、織物工、縮絨工、仕上工、その他多数が、全員それぞれの手仕事を結合しなければならない。そればかりか、これらの職人のうちの或る者から、しばしば極めて遠隔な地方に住んでいる他の職人の所へ輸送するのに、何人の商人や運送人が関わらなければならなかったことだろう。染色工が使用し、しばしば世界の最遠隔地の所産である、様々な薬品を集め合わせるために、特にどれ程の商業と海運が、どれだけ多く造船工、船員、製帆工、製鋼工が、従事しなければならなかったことが... [A. スミス『国富論』（岩波文庫）p.34、多少の語句の変更あり]。

他方で交換（市場）価値を「労働」という特殊な財によって実体化する自然主義的（経験論的）イデオロギーに陥った；

[...] ある商品の価値は、その商品を所有しかつそれを自分で使用するつもりも消費するつもりもなく他の商品と交換しようと思っている人にとっては、それによって彼が購買または支配し得る労働の量に等しい。従って労働が全ての商品の交換価値の真の尺度なのである [ibid, p.63]。

新古典派経済学は市場モデルの中で市場価値の概念を整合的かつ厳密に構成し、古典派のイデオロギーを克服した；

[...] 解析的には効用 u は方程式 $u = \Phi(q)$ によって消費量 q の関数として与えられ、希少性 [限界効用] r はその導関数 $r = \Phi'(q) = \phi(q)$ によって同じくその消費量の関数として与えられる。[...] 財 a の価格を p_a 、財 b の価格を p_b としたとき、それらが] 条件 $p_b \partial_a u(q) = p_a \partial_b u(q)$ に達するまで財 a のある量と財 b のある量とを交換することにより、満足の最大量が得られるのである [L. ワルラス『純粹経済学要論』（岩波書店）pp.79-85、多少の記号の変更あり]。

同時に「市場」の概念が理論的に確立された。現代的に言えば市場とは、確定した種類の財と呼ばれる取引対象、効用関数と初期保有財によって特徴付けられる消費者と呼ばれる経済主体、及び生産関数によって特徴付けられる生産者から成るそれらの総体である。このとき古典派が学問の対象としていた「現実の市場」は、理論的表象装置としての「市場モデル」に取って代えられた。この事実を明確に自覚せずに、市場モデルを様々な背景制度に支えられて存在している現実の市場と無造作に同一視するとき、我々はいわゆる「市場原理主義」のイデオロギーに落ち込むことになる。